

鯨のまち・北海道網走市の過去・現在・未来を辿る －北西太平洋鯨類科学調査と小型沿岸捕鯨等を通して－

岸本 充弘⁽¹⁾

I. はじめに

1 研究の目的と背景

北海道網走市はオホーツク海に面した人口約3万6千人のまち（写真①能取岬、写真②帽子岩）で、豊かな水産資源を背景にし、水産業を中心に発展してきた。明治以降近代捕鯨会社の事業場が設置され、現在は、日本最北端の小型沿岸捕鯨基地でもある。また、2017（平成29）年度から北西太平洋鯨類科学調査沿岸調査（網走沖）が開始され、網走市はその調査基地ともなった。一方、2018（平成30）年12月26日に日本政府は国際捕鯨委員会（IWC：以下「IWC」）を脱退し、翌年7月からの領海内及び排他的経済水域（EEZ）内での商業捕鯨再開を行うことを官房長官談話として表明した。そこで筆者は、鯨のまち・網走市の捕鯨の歴史を辿るとともに、北西太平洋鯨類科学調査が開始され、更にIWC脱



写真①



写真②



写真③

退後の商業捕鯨再開を見据え、網走市の現状や鯨のまちとしての取り組みについて、資料調査や関係者への聞き取りを行い、将来へ向けてのまちづくりの方向等について検証することを試みた。今回その調査を実施するため、下関市立大学附属地域共創センターの助成を受け、2018（平成30）年8月に網走市での北西太平洋鯨類科学調査の現場での調査、水産庁、網走市役所（写真③）等へのヒアリングや、先行研究・関連資料調査等を行った。

II. 鯨のまち・北海道網走市の捕鯨の歴史を辿る

1 古代から商業捕鯨全盛期まで

北海道では3世紀頃からアイヌ文化期にかけ、鯨類は食料として、また鯨骨は道具類の原材料として利用されており、5～9世紀にかけオホーツク海沿岸に広がっていたオホーツク文化には、鯨の骨を意図的に集めた「鯨塚」の存在もある⁽²⁾。北海道の先住民であるア

イヌにとって、鯨はカムイ、いわゆる精霊や神ではなく、海で一番高いレプンカムイである、沖の精霊シャチが授けてくれる食料と考えられていた。また、アイヌの捕鯨は道南の噴火湾岸を除いて一般的ではなかったようだが、肉は食用、鯨ヒゲは樺太アイヌにより、犬ぞりの滑走版として利用されていた形跡がある。

一方、網走市を代表するモヨロ貝塚は今から1300年前の古墳時代、北海道の続縄文文化の足跡を辿ることができるが、モヨロ貝塚館（写真④）によれば、当時の出土品から推察すると、この地域で鯨漁をやっていた可能性があるという。モヨロ貝塚の遺物にある固定鋤頭は鯨骨で作られており、また、モヨロ貝塚出土のオホーツク式文化期の骨斧は鯨骨で作られた短冊型と言われ、骨臼、鯨の脊椎骨を利用した臼や、大型の鯨骨を板状に加工したものでまな板や盆として使用されていたり、骨牙偶、人偶等として、マッコウ鯨の歯で作った婦人像も出土している。



写真④

その後、北海道での捕鯨に関する記録は江戸時代まで下り、幕府直轄時代に北海岸が舞台となる。この頃既に、米国帆船式捕鯨のジャパングラウンド進出の影響による鯨の減少で、日本沿岸での古式捕鯨が衰退し始めていたが、当時の欧米人を日本近海へ引き付けていたのが北洋周辺の鯨であり、その基地として北海岸が重視されていた。1866（慶応2）年には捕鯨技術習得希望者に対し函館入港外国船への乗船許可を行い、水野土佐の守も蝦夷地での捕鯨事業を計画したが、実現しなかった。幕末期では、蝦夷地の寄り鯨が函館奉行、場所請負人、アイヌに三等分され油や塩漬肉に加工されており、幕府は1799（寛政11）年松前藩の影響下にあった東蝦夷地を直接支配し、捕鯨もエトロフ島に鯨組を設置しようとしたが、費用の面から実施に至らなかった。その後、1854（嘉永7）年に函館が開港され、入港した捕鯨船から捕鯨技術を学んだものの本格的に捕鯨を行う前に明治維新となる。明治維新後も、山口藩が増毛郡と留萌郡でアメリカ式捕鯨を試みたが、地元漁民との軋轢から成功に至らず、石川県出身の齊藤知一が1886（明治19）年に羽幌で捕鯨を実施し、ようやく北海道における捕鯨がはじまることとなる。

我が国の近代式捕鯨は1899（明治32）年に山口県の岡十郎により東洋捕鯨の前身、日本遠洋漁業が創立され、汽船によるノルウェー式捕鯨業により初めて開始されたが、1909（明治42）年に鯨類繁殖保護のため鯨漁取締規則が制定され、当時は許可船数を30隻以内に限定していた。日本遠洋漁業は、その後合併再編され東洋捕鯨となったが、新しい資源を求めて大正元年に北海道に進出し、室蘭を根拠として事業を開始するとともに、1915（大正4）年5月に網走二ツ岩海岸北側にあるタンネシラリに事業場を増設し、オホーツク海の捕鯨に乗り出した。当時からオホーツク海には鯨の回遊が多く、沖合を群遊する状況が沿岸からも見られるほどで、1899（明治32）年は網走付近だけで7月中に2頭も寄鯨があったという。また同じく1915（大正4）年、大日本水産も網走に捕鯨根拠地を建設

する計画で網走漁業組合に了解を求め、同組合では総代会を開いて異議ない旨回答しているが、事業着手には至らなかった。また、東洋捕鯨では宗谷岬から知床岬沖合一带を操業区域とし、捕獲1頭につき5円を漁業組合に寄付するという契約であったが、初年度は探鯨に時間を費やしたため、捕獲は31頭にすぎなかった。しかし、1916（大正5）年には5月下旬から操業を開始⁽¹⁵⁾、約100日間で長須鯨127頭、座頭鯨4頭の131頭を捕獲し、価額約10万円という好成績をあげた。ところが、1917（大正6）年は振るわず長須41頭、イワシ2頭の43頭にとどまったが、当時はまだ鯨食が広く普及していなかったため全部を肥料粕とし、油をとって移出したという。この年捕獲された鯨の一部は塩蔵しているが、金額では粕、油、肉の順であった。これらの製肥・採油事業は地元業者が請け負い、事業利益で網走もうるおうと共に、解体作業には見物客が押し寄せ絵葉書まで発売される有様⁽¹⁶⁾であった。1918（大正7）年の統計資料等によると、当時の網走町の漁獲高は鯨が24万8千貫（約930トン）と網走全体漁獲量の半ばを占め、その価額は2万4千円でニシンとほぼ同額となっている。また製造水産物では鯨粕と油を合わせて4万6千円で、塩サケの4万3千円を上回り第1位であったが、捕鯨会社が根室方面に主力を移すことになり、網走根拠の操業は1918（大正7）年をもって中断され、再開は網走築港の完成した1930（昭和5）年からとなる。

その後、日本水産では1931（昭和6）年から捕鯨事業を再開し、初年度は53頭の捕獲があったが、1932（昭和7）年には15頭、1933（昭和8）年14頭、1934（昭和9）年2頭、1935（昭和10）年2頭と減少したため同年をもって事業を休止した。網走港には、1931（昭和6）年にタンネシラリから移転した際の捕鯨基地跡の碑がある（写真⑤）。水産製造物（昭和9年網走支庁管内道庁統計書（表1））によれば、当時は肥料としてクジラ粕が720貫（約2.7トン）、価額216円、魚油の原料としてクジラ油も710貫（約2.67トン）、価額355円が製造されており、他の水産物と並んで、肥料や魚油の原料として鯨が使用されていた。当時は、戦時下の食肉・皮革資源増産が要請され、



写真⑤

日本水産では1940（昭和15）年に網走工場を開設、初年度30頭・10万円を目標に操業を開始⁽¹⁹⁾し、9月8日までに抹香鯨13頭、ヒゲ鯨17頭、計30頭の目標を達成した。捕獲された鯨は金額にして1頭4～5千円、合計価額14～15万円の水揚げで、肉は大阪市場へ送られ食肉難の緩和に、皮は冷革代表品として、また油・骨は肥料として利用された。なお日本水産網走冷凍工場では同社冷凍船厚生丸が1940（昭和15）年夏、南水洋で捕獲

| 種類 | 内訳 | 数量(貫) | 価額(円) |
|----|-------|---------|---------|
| 肥料 | ニシン粕 | 383.461 | 126.702 |
| | イワシ粕 | 456 | 110 |
| | タラ粕 | 13.970 | 3.903 |
| | クジラ粕 | 720 | 216 |
| | カレイ粕 | 11.160 | 3.936 |
| | 荒粕 | 5.952 | 1.457 |
| | スケトウ粕 | 1.800 | 540 |
| | その他 | 240.692 | 39.975 |
| 小計 | | 638.211 | 176.839 |
| 魚油 | イワシ油 | 19 | 7 |
| | ニシン油 | 27.862 | 10.991 |
| | タラ油 | 3.005 | 1.311 |
| | クジラ油 | 710 | 355 |
| | サメ油 | 19.909 | 7.347 |
| | その他 | 3.322 | 1.235 |
| 小計 | | 54.827 | 21.246 |

出所：網走市史下巻124頁から作成

した冷凍白長須鯨を試験的に2400貫(約9トン)を網走野付牛・美幌・斜里地方へ供給し、冬季間の魚肉及び獣肉不足を補い非常に喜ばれたという。網走では戦時中の食肉・皮革不足を反映し、イルカ、アザラシなどの捕獲も盛んで、食料として捕獲されていた記録もある。また、網走では戦前、捕鯨税という税金があった。1932(昭和7)年網走町長宛ての申告書の中で「六月七日長須一頭、漁場網走北東23哩、右申告候也」とあり、地方税48円、町税28円80銭でナガスクジラ1頭捕ると76円80銭が納付され、1941(昭和16)年からは「鯨1頭に付き80円」となっている。また、「戦後、1948(昭和23)年の新聞記事によると日本水産捕鯨部が60万円、豊洋捕鯨が10万円の捕鯨税を滞納しており、市は日本水産と交渉し最終処分も考えていると報じている。」と当時の捕鯨税の状況を裏付ける記載もある⁽²¹⁾。

一方、戦後は日本の食糧危機と世界的な油脂不足の緩和から、いち早く連合国軍最高司令官総司令部(GHQ)が許可した漁業が捕鯨であった。食糧難を受け、戦後すぐに網走でも捕鯨が行われており、1947(昭和22)年5月23日付あばしり新聞では、「南水洋から網走沖へ勇壮な捕鯨船、いよいよこれから展開」との見出しで、「6月から大型捕鯨船7隻が集結、総員300名近くの大集団で七、八十尺もある長須大鯨の捕獲に豪壮な大絵巻がくり広げられる。網走で捕獲鯨の種類はミンク、シャチ、槌鯨、長須の4種、ミンクは1頭3万円、長須は30万円。」とある。また、1947(昭和22)年7月23日付同新聞では、「鯨の産地なのになぜ市民に配給されないのか」、「食糧難の市民へ朗報、鯨肉近く配給か」との記事もあり、戦後食糧難の状況改善に、鯨が大きく貢献していたことが伺える。

網走では1950(昭和25)年に7企業が捕鯨の操業をしていたが、大手捕鯨会社は撤収し、現在は北海道内で網走港のみを根拠とする2社が小型鯨を主体に操業している。主要漁業種別漁獲状況(表2)及び主要魚種別漁獲高(表3)によれば、1955(昭和30)年には鯨が1719トン、約1億3千万円の漁獲量があり、漁獲量ではかれいやさけ、金額では、ほっけに引けをとらないものであったが、年を追うごとに漁獲量や金額は減少していく。

表2 主要漁業種別漁獲状況(市水産統計30年史)

| 漁業種別 | 昭和30年 | | 昭和35年 | | 昭和40年 | | 昭和45年 | | 昭和50年 | | 昭和52年 | |
|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|---------|-----------|---------|------------|
| | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) |
| 網走産長須鯨 | 54,273 | 838,591 | 48,508 | 859,714 | 31,297 | 884,087 | 75,880 | 1,409,693 | 122,613 | 1,892,319 | 94,098 | 7,280,953 |
| 元産網走鯨 | 2,873 | 278,503 | 1,861 | 309,783 | 972 | 284,418 | 1,203 | 534,783 | 2,853 | 1,484,374 | 1,823 | 1,615,748 |
| 国産鯨 | 4,487 | 71,244 | 3,029 | 88,519 | 3,709 | 94,002 | 1,231 | 131,999 | 2,481 | 349,350 | 1,793 | 600,503 |
| 初産鯨 | 111 | 3,871 | 48 | 810 | 239 | 8,819 | 2,804 | 83,528 | 298 | 79,463 | 290 | 9,289 |
| さんまほろこ網走鯨 | 2,433 | 32,153 | 3,437 | 49,531 | 1,332 | 57,338 | 1,353 | 332,333 | 5,335 | 190,337 | 21,145 | 1,794,353 |
| 鯖 | 1,713 | 1,393,24 | 322 | 29,534 | 332 | 33,333 | 347 | 33,333 | 114 | 162,787 | 133 | 112,333 |
| その他鯨 | 1,473 | 24,823 | 4,333 | 35,332 | 33,333 | 302,223 | 1,024 | 177,042 | 33 | 30,034 | 3,349 | 531,733 |
| 海面漁業計 | 67,357 | 1,379,970 | 56,323 | 1,190,233 | 37,745 | 2,159,138 | 85,533 | 3,947,743 | 132,533 | 3,347,330 | 122,267 | 11,532,367 |

出所:『網走市史』網走市庁記録、1937年、272～273頁より転載

表3 主要魚種別漁獲高(市水産統計30年史)

| 漁業種別 | 昭和30年 | | 昭和35年 | | 昭和40年 | | 昭和45年 | | 昭和50年 | | 昭和52年 | |
|-------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|--------|-----------|---------|-----------|---------|------------|
| | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) | 漁獲量(吨) | 金額(千円) |
| すけのぼし | 29,709 | 333,233 | 29,333 | 243,146 | 19,194 | 49,334 | 57,148 | 784,319 | 86,333 | 1,591,103 | 87,543 | 3,702,331 |
| ほっけ | 18,018 | 132,367 | 19,311 | 284,663 | 4,887 | 150,380 | 8,887 | 188,742 | 8,034 | 203,617 | 13,233 | 332,888 |
| かばい | 1,763 | 38,437 | 2,463 | 23,754 | 4,332 | 104,844 | 2,478 | 124,538 | 2,170 | 149,208 | 1,820 | 408,820 |
| 合計 | 1,343 | 248,823 | 3,011 | 288,518 | 774 | 202,444 | 998 | 314,808 | 1,343 | 1,326,187 | 1,329 | 1,381,993 |
| さんま | 3,733 | 32,153 | 3,533 | 49,531 | 1,332 | 57,337 | 1,401 | 332,333 | 5,335 | 190,337 | 21,145 | 1,794,353 |
| ぶり | 1,713 | 1,393,24 | 322 | 29,534 | 332 | 33,333 | 347 | 33,333 | 114 | 162,787 | 133 | 112,333 |
| その他 | 1,343 | 121,733 | 3,333 | 78,532 | 3,232 | 114,833 | - | - | - | - | - | - |
| 海面漁業計 | 67,357 | 1,379,970 | 56,323 | 1,190,233 | 37,745 | 2,159,138 | 85,533 | 3,947,743 | 132,533 | 3,347,330 | 122,267 | 11,532,367 |

出所:『網走市史』網走市庁記録、1937年、274～275頁より転載

2 小型沿岸捕鯨と網走沿岸域北西太平洋鯨類科学調査について

網走市は、前述したとおり函館市、鮎川町（石巻市）、和田浦（南房総市）、太地町等と並ぶ日本国内での小型沿岸捕鯨基地の1つであり、市内にある三好捕鯨は1953（昭和28）年、下道水産は1969（昭和44）年に操業を始め、小型沿岸捕鯨で捕獲されるツチクジラはこの2社が2頭ずつ捕獲し、年間4頭が網走に陸揚げされている（写真⑥網走港の鯨体を引揚げるスロープ）。2社は北西太平洋鯨類科学調査の沿岸調査にも、一般社団法人地域捕鯨推進協会⁽²³⁾の一員として従事し、下道水産は道内の業者に委託して大和煮の缶詰を製造し、鯨のまち・網走を支えてきた。



写真⑥

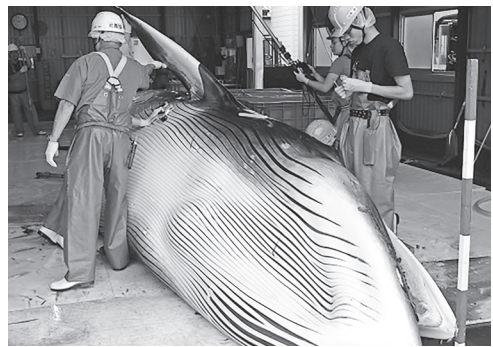
その後、2017（平成29）年6月から網走では、新北西太平洋鯨類科学調査計画（NEWREP-NP）⁽²⁴⁾に基づく科学調査が行われており、水産庁プレスリリースによれば（1）日本沿岸域におけるミンククジラのより精緻な捕獲枠算出（2）沖合におけるイワシクジラの妥当な捕獲枠算出を目的に、網走沖10マイルの海域においてミンククジラの捕獲調査を2017年度～2028年度の12年間で行い、網走沿岸域の目標捕獲頭数は47頭、後半6年間は前半期の結果を踏まえて再計算することとなっている。この調査は、2014（平成26）年3月31日の国際司法裁判所（ICJ）の判決を受け、より科学調査に重点を置いた内容となっており、非致命的調査や資源量推定のための目視調査、移動を追跡するための衛星標識の装着の試行的実施、バイオプシー（皮膚標本）から抽出したDNAの分析による年齢推定方法の実行可能性・有用性の検証等について、沿岸小型捕鯨船を使用した標本採集船5隻により実施されている。この網走沿岸域調査について、水産庁捕鯨室によれば、「網走で調査を実施することになった背景は、網走沖ではミンククジラの2つの繁殖集団（J系群及びO系群）が混在しており、その混合率と年齢情報の両方を得ることで、より安全なミンククジラ捕獲枠の算出が可能となることから、網走沖で調査を新たに行うことになったものである。加えて、網走が歴史的に捕鯨の基地であったことや現在のツチクジラを捕獲していることから地元の理解も得やすいため、実施されることとなった。」とのことであった。

平成30年度北西太平洋鯨類科学調査（オホーツク海側沿岸域調査）は、2018（平成30）年8月30日に終了し、翌31日付の水産庁プレスリリースによれば、調査期間は平成30年8月1日～8月30日までの30日間でミンククジラ47頭が捕獲。内訳は雄16頭（平均体長6.62m（4.40～7.58m）、雌31頭（平均体長7.37m（4.79～8.55m）であった。また、目視調査による発見頭数はミンククジラ91群93頭、ナガスクジラ114群163頭、ザトウクジラ1群1頭、ツチクジラ11群95頭、シャチ8群32頭等であった。今回の調査で得られたデータは、太平洋側沿岸域調査、沖合域調査と合わせ、詳細な分析を行った上で、IWC科学委員会に報告されるなど、北西太平洋における鯨類資源の保存及び管理に資す

る科学的知見の蓄積・増進に役立てられるという。筆者が網走を訪れた2018（平成30）年8月22日から8月24日の間は、折からの台風の影響を受け、調査船が出港できたのが8月23日のみとなったが、その日、体長7mを越える雌のミンククジラが捕獲できたとの連絡があり、網走港での渡鯨（写真⑦）から調査（写真⑧）、その後の解体等について見学をさせていただくことができた。捕獲された個体は妊娠個体ではなかったが、胃からは真新しい溶解前の多数のイワシを見ることができ、プランクトンやオキアミを主食とするヒゲクジラが多くの魚を摂餌する現状を確認することができた。捕獲されたミンククジラの副産物は、網走市内のスーパーで手作りレシピを置いた「網走沖産ミンククジラ（生）」特設コーナーで販売され、（写真⑨）、多くの市民の方が、網走産鯨肉を購入する姿が見られた。しかしながら、2018（平成30）年12月26日に日本政府は菅官房長官談話⁽²⁵⁾として、IWCからの脱退と、領海及び排他的経済水域（EEZ）内での翌年7月からの商業捕鯨再開を表明した。このことが今後の網走を含む日本の捕鯨の大きな転機となるのは間違いない。



写真⑦



写真⑧



写真⑨

3 網走の鯨への取り組みと現状

網走は昔から鯨の尾羽を食するなど鯨食文化が定着しており、1950～60年代は鯨が非常に食べられていたという。また、現在市内で食べられている、すまし仕立てのくじら汁や鯨の竜田揚げは、網走発祥のすり身やオホーツクの魚介類を入れたモヨロ鍋、キンキ、しじみ、わかさぎ、しらうおや、オホーツクサーモン（カラフトマス）を入れたザンギ丼と並ぶ網走の海の幸でもある。それでは、鯨のまち・網走では、鯨の普及啓発等を目的にどのような鯨事業に取り組んできたのであろうか。網走市水産漁港課⁽²⁶⁾によれば、網走の鯨事業の中心を担っているのは、網走市長が会長を務める網走くじら協議会である。同協議会は、捕鯨一時停止後の1992（平成4）年5月に網走市と三好捕鯨、下道水産の両小型捕鯨会社の3者で組織され、鯨の普及啓発に関する事業を行い、①捕鯨推進対策事業（定期総会、全国会議（全国鯨フォーラム、捕鯨を守る全国自治体連絡協議会総会への出席等）②捕獲調査物販売事業及び沿岸捕鯨事業③鯨食文化普及事業（東京農大新生父母歓迎会への鯨肉提供、くじら学校給食の実施等）の3事業を実施し、市民イベント等での鯨肉販売等の普及啓発活動を行っている。また、市内小中学

校での鯨給食⁽²⁷⁾は1993年からこれまで18回実施し、現在も年1回小中学校で鯨肉給食を3千食出しており、1食40円を超えるものについては同協議会で負担しているという。

網走市民の鯨を食べる機会について同市水産漁港課では、「2017（平成29）年度から網走に沿岸調査捕鯨副産物が揚がり、網走漁協が市場枠の取扱いができるようになったことで、鮎川、釧路産と併せて生の鯨肉を食べる機会が以前より増えている。これは、地元スーパーが買受人になり、スーパーに入るようになったことが大きく、1頭目が揚がったことが地元の新聞で宣伝され、網走（沖）産と表示に入っている効果で、市内には鯨を出す居酒屋が少ないものの、いつ鯨が入るかの問い合わせも多い。」という。市としては、「沿岸調査と連動した新たな取り組みを行うわけではないが、昨年市役所やオホーツク総合振興局で鯨定食⁽²⁸⁾を出し好評だった。」とのことだが、残念ながら現在市役所の食堂は閉鎖されている状況にある。

一方、網走市総合計画（2008（平成20）年～2017（平成29）年）基本計画第3章「にぎわいと活力にあふれるまち水産物販売、水産加工」では、「水産物の高次加工や地産地消の取り組みを進め水産物における網走ブランドの定着を目指す」とあり、網走おさかな委員会において選定された網走市における特徴的な水産物であるカラフトマス、スケトウダラ、キンキ、シラウオ、クジラ、シジミ、ワカサギを「活き枠き7珍」とし、その中に鯨が選定されている。網走での鯨の取扱い等に関する近年の統計的数値を少し辿ると、2008（平成20）年版オホーツクの水産・北海道オホーツク総合振興局管内漁業生産⁽²⁹⁾の状況によれば、鯨（網走市のみ）は9トン、金額3,211千円で、全体数量51,924トン、全体金額10,287,408千円と比較すると、鯨はオホーツク管内の漁業生産全体数量の約0.02%、金額は0.03%であった。また、平成24年から28年までの主要漁業種別漁獲状況（表4）によれば、沿岸小型捕鯨の漁獲量は平均36トン、生産額は平均約10,692千円で、海面漁業の合計平均漁獲高の約0.07%、平均生産額の約0.09%を占め、また平成24年から平成28年までの主要魚種別漁獲高推移（表5）によれば、鯨の平均漁獲量は平均32.2トン、生産額は平均10,017千円で海面漁業の平均漁獲高の約0.06%、平均生産額の約0.08%を占めている。更に、平成28年魚種別総漁獲高（表6）によれば、オホーツク海が漁獲場所となる海面漁業は漁獲量が37,171.0トン、生産額が106億2,875万円となり、そのうち捕鯨業者の取扱額は約0.1億円であった。

表4 主要魚種別漁獲状況（平成24～28年）

| 漁業種別 | 平成24年 | | 平成25年 | | 平成26年 | | 平成27年 | | 平成28年 | |
|---------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|
| | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) |
| 鯨類科学漁業 | 27.264.8 | 1,592,358 | 21,703.3 | 1,892,731 | 18,735.4 | 1,854,947 | 19,345.9 | 1,988,334 | 16,106.8 | 1,486,261 |
| 定置網漁業 | 14,159.0 | 6,578,505 | 15,679.0 | 6,786,599 | 9,223.2 | 4,353,063 | 8,909.0 | 4,510,858 | 9,693.6 | 5,014,831 |
| 延縄漁業 | 568.1 | 807,639 | 468.1 | 769,508 | 712.9 | 861,597 | 572.2 | 805,948 | 534.9 | 753,669 |
| 刺網漁業 | 646.3 | 314,077 | 708.8 | 356,021 | 343.3 | 282,154 | 453.4 | 352,575 | 504.5 | 415,296 |
| ほたて新網漁業 | 12,946.2 | 1,373,092 | 16,872.0 | 2,778,326 | 15,797.2 | 2,438,102 | 13,260.4 | 2,793,273 | 6,838.0 | 1,782,173 |
| 沿岸小型捕鯨 | 40.0 | 14,680 | 39.0 | 10,800 | 39.0 | 10,800 | 39.0 | 10,800 | 23.0 | 6,381 |
| その他漁業 | 4,054.3 | 1,043,408 | 3,108.4 | 1,020,170 | 2,945.0 | 992,724 | 3,582.6 | 1,151,663 | 3,470.6 | 1,170,137 |
| 海面漁業計 | 58,678.8 | 11,723,754 | 58,578.7 | 13,604,556 | 47,795.9 | 10,793,345 | 46,162.4 | 11,611,453 | 37,171.0 | 10,628,748 |

出所：『平成28年版水産統計』網走市、2017年、7頁から作成

表5 主要魚種別漁獲高推移（平成24～28年：5年間）

| 漁業種別 | 平成24年 | | 平成25年 | | 平成26年 | | 平成27年 | | 平成28年 | | 5年平均 | |
|--------|-----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|----------|------------|
| | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) | 漁獲量(%) | 生産額(千円) |
| すけとうだら | 21,245.9 | 1,058,669 | 14,606.6 | 626,370 | 13,684.9 | 915,021 | 16,313.9 | 1,472,388 | 12,383.5 | 1,035,541 | 15,647.0 | 1,023,588 |
| ほたて | 112,920.8 | 1,387,793 | 16,847.6 | 2,769,564 | 15,771.8 | 2,431,137 | 13,225.4 | 2,791,163 | 6,800.1 | 1,775,410 | 13,113.1 | 2,227,006 |
| さけ | 13,478.9 | 6,533,226 | 14,836.8 | 6,474,750 | 8,787.6 | 4,197,927 | 8,423.1 | 4,291,534 | 6,988.4 | 4,269,256 | 10,503.0 | 5,117,339 |
| いか | 819.9 | 173,143 | 3,516.2 | 1,008,749 | 2,265.3 | 572,268 | 511.3 | 137,292 | 20.9 | 12,354 | 1,426.7 | 380,761 |
| くじら | 41.00 | 15,520 | 39.0 | 10,800 | 38.0 | 10,703 | 20.0 | 6,682 | 23.0 | 6,381 | 32.2 | 10,017 |
| その他 | 5,457.8 | 1,202,412 | 5,093.7 | 1,132,130 | 4,004.9 | 1,176,346 | 5,169.3 | 1,406,650 | 4,955.2 | 1,462,637 | 4,936.1 | 1,276,039 |
| 海面漁業計 | 58,678.80 | 11,723,754 | 58,578.7 | 13,604,556 | 47,795.9 | 10,793,345 | 46,162.4 | 11,611,453 | 37,171.0 | 10,628,748 | 49,877.4 | 11,672,371 |

出所：『平成28年版水産統計』網走市、2017年、6頁から作成

表6 平成28年魚種別総漁獲高

| 漁種名 | 平成28年 | | 構成比(%) | |
|--------|----------|------------|--------|-------|
| | 漁獲量(トン) | 生産額(千円) | 漁獲量 | 生産額 |
| すけとうだら | 12,383.5 | 1,035,541 | 33.3 | 9.7 |
| さけ | 6,988.4 | 4,269,256 | 18.8 | 40.2 |
| ます | 2,665.9 | 743,157 | 7.2 | 7.0 |
| ほたて | 6,800.1 | 1,775,410 | 18.3 | 16.7 |
| ほたて稚貝 | 3,257.9 | 1,004,925 | 8.8 | 9.5 |
| くじら | 23.0 | 6,381 | 0.1 | 0.1 |
| その他 | 1,553.4 | 169,810 | 4.2 | 1.6 |
| 海面漁業計 | 37,171.0 | 10,628,748 | 100.0 | 100.0 |

出所：『平成28年版水産統計』網走市、2017年、3頁から作成

4. くじらのまちの将来展望

同市水産漁港課によれば、網走で鯨類科学調査が行われることで、「調査団の宿泊・飲食等（約70名）による1ヶ月間の経済効果は、宿泊や漁協での取り扱いを入れると数千万円単位になるのではないかと思われるが、科学調査であり経済効果の正確な数字や副次的効果は不明。」ということであったが、鯨類科学調査自体が網走に一定の経済効果をもたらしているのも事実であろう。一方、「網走にとって鯨は4頭で年間2千万円、ホタテ等年間150億円に比較すると少額だが、漁協が市場枠に乗ったことが大きく活気づいてくれば良い。鯨食文化の普及目的は、鯨を食べることを無くさないようにすることだが、将来どうなるかは商業捕鯨のスキームによって変わってくる。くじら協議会は商業捕鯨を再開するという目的があり、目的が達成されれば解散することになる。」という回答であったが、聞き取りを行った8月以降、9月にはIWCブラジル・フロリアノポリス会合が開催され、日本政府が提出した商業捕鯨再開へ向けての提案は否決され、IWC脱退も選択肢として協議されるようになってきた。その後、暮れも押し迫った2018（平成30）年12月26日、日本政府はIWCを脱退し、翌年7月からの領海内及び排他的経済水域（EEZ）内での商業捕鯨再開を行うことを菅官房長官談話として発表した。水産庁から商業捕鯨再開へ向け、沿岸捕鯨操業海域と基地として、網走、釧路、八戸、石巻、南房総、太地を、

沖合操業の根拠地として下関を想定する資料が示され、IWC 脱退と商業捕鯨再開へ向けた情報は、国内は元より世界中に駆け巡った。2017（平成 29）年度から開始された北西太平洋鯨類科学調査（オホーツク海側沿岸域調査）は IWC 脱退後どうなるのであろうか。水産庁捕鯨室によれば「IWC 脱退の 6 月末までは IWC に所属していることになるので、来年度の網走調査は実施予定。」で、7 月から始まる商業捕鯨の基地や根拠地については、「現時点では未定。」とのことであった。現段階での想定では、網走を基地とした商業捕鯨が 7 月以降に開始され、捕獲頭数等の枠は未定であるが、ミンククジラ等が捕獲されることが想定されている。商業捕鯨の再開は、網走市や網走の小型捕鯨会社にとっても長年の悲願であり、待ち望んだものである。今後、商業捕鯨の捕獲鯨種、捕獲頭数等の計画が具体的に示されれば、網走のくじらのまちとしてのビジョンや、将来に対する希望が、ようやく現実的に見えてくると思われる。網走では捕鯨以外にも、「あばしりネイチャークルーズ」が 2010 年に開始され、オホーツク海の鯨やイルカ、海鳥などを見るホエールウォッチングも行われており、それらを含めた地域振興策や経済効果が今後の網走市に、どのように計画され、もたらされていくのか、引き続き注視していきたいと考えている。

Ⅲ. おわりに

2018（平成 30）年の年末に官房長官談話として出された、日本の IWC からの脱退と本年 7 月からの我が国領海内及び EEZ 内での商業捕鯨再開のニュースは大変大きな話題となり、国内は勿論、世界中を駆け巡った。これにより我が国の長年の悲願であった商業捕鯨の再開が現実のものとなってきた。網走にとってもこのことを鯨のまちづくりの大きなきっかけとして、また鯨類科学調査に引き続き、網走が商業捕鯨基地となることで、地域振興につながる好機と捉えたまちづくりが行われる事を期待したい。

最後に、このたびの調査においてヒアリング等でご協力をいただいた水産庁捕鯨室の皆様、網走市水産漁港課の皆様、下道水産の下道社長様、網走沿岸調査に従事された皆様方にこの場をお借りし、改めてお礼申し上げます。

（注）

- （1）下関市立大学附属地域共創センター委嘱研究員、経営企画グループ長。
- （2）『北海道開拓記念館第 63 回特別展「鯨」図録』北海道開拓記念館、2007 年、3 頁。
- （3）注（2）前掲北海道開拓記念館編書、13 頁。
- （4）注（2）前掲北海道開拓記念館編書、14 頁。
- （5）米村喜男衛『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館、1950 年、序章及び 75 頁。モヨロ（語源は、モイ（湾）オロ（有る）コタン（村）のアイヌ人）貝塚は、網走市の中央を流れる網走川北岸河口にある遺跡で昭和 11 年 12 月貝塚としては唯一の指定を受けた史跡で約 1 千年前・石器時代末の貝塚である。
- （6）注（5）前掲米村喜男衛著書、53 頁。同様の記述が、大場利夫「モヨロ貝塚の出

土品」北海道大学、1962年、75頁。児玉作衛門『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会、1948年、59頁にもある。

- (7) 『網走市史上巻』網走市役所、1958年、59頁、152～156頁。
- (8) 注(7) 前掲網走市役所編書、589～590頁。
- (9) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、15頁。
- (10) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、16頁。
- (11) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、20頁。
- (12) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、21頁。
- (13) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、22頁。
- (14) 『網走市史下巻』網走市役所、1971年、907～913頁、『新網走小史』網走市総務部、1987年、271頁。『網走市史下巻』、907頁には、「大正4年、沖合、遠洋に出て計画しきりに企図せられつつあるも錨地なし。作業が不可能、大正10年より起工せらるべき網走港の修築成子に至らば、沖合遠洋漁業勃然して隆興すべし」との記載があり、港湾修築が急がれていた状況の記載がある。また、網走タイムズ連載2005～2006写真で巡る網走今昔物語7/3号道内唯一の捕鯨基地『クジラ文化①』には、「大正4(1929)年東洋捕鯨が二ツ岩の陰の海岸「タンネシラリ(アイヌ語で「長い平礫」の意味)に捕鯨工場(解体場)を開設したことに始まる。市内を結ぶ道路無、人、物の運搬は船。大正7年(8年説あり)に乱獲がたたり、捕鯨場は閉鎖されたが、昭和6年に再開。網走周辺の沿岸・海岸にフンペオマナイ(アイヌ語で「鯨が入った入江」の意)」と呼ばれる地名あり」との記載もある。また、網走タイムズ連載2005～2006写真で巡る網走今昔物語7/5号「環境対策に細心の注意「クジラ文化②」」や、『続網走百話』網走市教育委員会、1992年、64～65頁には、「日本水産が東洋捕鯨より前にタンネシラリへの進出計画を立てたが着業せず。当時捕鯨会社は環境対策を施す。網走漁協と結ばれた契約では鯨の血、解体時に出る汚水は海に流さず貯留して加工する工場を付設する。背景は「青森事件」M44年に東洋捕鯨の焼き討ち事件。東洋捕鯨は環境対策と捕獲一頭につき5円を漁協に寄附。当時盛りそば1杯10銭、国家公務員70円。」との記載もある。
- (15) 網走タイムズ連載2005～2006写真で巡る網走今昔物語7/6号「戦場と化した木造船「クジラ文化③」」によれば、当時の捕鯨船は15トン、エンジンは50馬力の焼玉エンジン速力7ノット。
- (16) 網走タイムズ連載2005～2006写真で巡る網走今昔物語7/8号「解体は観光資源だった「クジラ文化④」」や、『続網走百話』65頁には、「東洋捕鯨の解体場は網走の一大観光地となっており近隣から見物客が押し寄せた。タンネシラリへ行く道は今もなく干潮に合わせて海を渡るが断崖を降りる。写真には着物姿の女性。夜間見学も行われていた。見学には花街の芸奴漣のほか女満別青年団160名、野付牛の小学生130名など遠くから連日のように大勢の見物人が押しかけて名所になって

- いた。ヒゲは地元商店で加工され北見名物として売り出された。」との記載がある。
- (17) 注(2) 前掲北海道開拓記念館編書、25頁によれば、網走捕鯨基地の所在は、東洋捕鯨が1915(大正4)年～1920(大正9)年、大東捕鯨が1930(昭和5)年～1934(昭和9)年、日本捕鯨が1931(昭和6)年～1936(昭和11)年、日本水産が1940(昭和15)年～1963(昭和38)年)。
- (18) 注(14) 網走市役所編書、1565～67頁によれば、1931(昭和6)年につくられた解体場はオホーツク海で捕獲されたクジラが揚がっていた。捕鯨船がクジラを捕って港に戻ると合図の汽笛を三度鳴らし、街の人々はクジラのポーが鳴ったとして解体場に駆け付け、ナガス、ザトウが揚がっていた。戦後の一時期網走港だけで7隻の捕鯨船がいて100頭を超えるクジラが捕られ、大型クジラの解体場は1962(昭和37)年に消え、付近のなぎさをクジラ浜と呼んでいたが、今は岸壁になっている。「捕鯨基地跡」の史跡標柱は港町31南六東七の公衆トイレ横にある。『網走市市政施行50年記念・史跡標注ガイド・網走歴史散歩』網走市教育委員会、1998年、25～28頁。
- (19) 注(14) 網走市役所編書、1565～1566頁によれば、「事業開始にあたり同事務所では次のように語ったと地元新聞は報じている「オホーツク海の鯨は他へ移動しない習性をもっているのです。池の中にいるのを捕へるようなものです。しかしこの鯨は他漁場と違って非常に捕鯨船には敏感で船が行くとどんどん逃げてしまうが、5年も出漁しなかったのだからたいして忘れていところで、快速30ノットの太平丸で追えば大丈夫だと思います。オホーツク海は長須鯨が多く、62尺以上あるのが捕れるでしょう。1頭7～8千円はするでしょうから、20頭も捕れば十分採算がとれます。工場では主として鯨油をやり、肉は東京・大阪へ送ることになっています。網走の白井さんが節米のため肉や臓物を町民には食わしてくれと言っていますが、肉は16貫目、6～70円はするでしょう。臓物も相当いい値段で取引されます」との記載がある。
- (20) 注(14) 網走市役所編書、1566頁によれば、「1940(昭和15)年の新聞に次の記事がある。時潮に乗り国策産業として網走近海に進出したイルカ事業は皮革代用品の至宝でありまた代用食の寵児として内地方面に歓迎されているが、1頭の生産額は目下のところ37、8円を唱へられており、往時は網走地方の市場に出しても1頭1円ぐらいで嫌々ながら買上げられたイルカも一躍重要資源の一役を買うにいたった。本年豊国水産が硫黄山沖合で捕獲した数は1千頭を越えつつあるから現在では約4千円の水揚げをしたわけになる。翌年からの本格戦こそ刮目に価するであろう」との記載がある。
- (21) 注(14) 前掲網走市教育委員会編書、220～221頁。
- (22) 注(14) 前掲網走市総務部編書、271頁。
- (23) 2010(平成22)年1月29日に日本沿岸における鯨類の資源調査を行うために小型

捕鯨業者によって設立された非営利組織。

(24) New Scientific Whale Research Program in the western North Pacific。①ミンククジラの捕獲調査（沿岸域、沖合域）沿岸域目標捕獲頭数／年：47頭（網走沿岸域）80頭（太平洋側沿岸域）、沖合域の目標捕獲頭数／年：43頭 ②イワシクジラの捕獲調査（沖合域）目標捕獲頭数／年：134頭。

(25) 平成30年12月26日内閣官房長官談話 平成三十年十二月二十六日

一 我が国は、科学的根拠に基づいて水産資源を持続的に利用するとの基本姿勢の下、昭和六十三年以降中断している商業捕鯨を来年七月から再開することとし、国際捕鯨取締条約から脱退することを決定しました。

二 我が国は、国際捕鯨委員会（IWC）が、国際捕鯨取締条約の下、鯨類の保存と捕鯨産業の秩序ある発展という二つの役割を持っていることを踏まえ、いわゆる商業捕鯨モラトリアムが決定されて以降、持続可能な商業捕鯨の実施を目指して、三十年以上にわたり、収集した科学的データを基に誠意をもって対話を進め、解決策を模索してきました。

三 しかし、鯨類の中には十分な資源量が確認されているものがあるにもかかわらず、保護のみを重視し、持続的利用の必要性を認めようとしない国々からの歩み寄りは見られず、商業捕鯨モラトリアムについても、遅くとも平成二年までに見直しを行うことがIWCの義務とされているにもかかわらず、見直しがなされてきていません。

四 さらに、本年九月のIWC総会でも、条約に明記されている捕鯨産業の秩序ある発展という目的はおよそ顧みられることはなく、鯨類に対する異なる意見や立場が共存する可能性すらないことが、誠に残念ながら明らかとなりました。

この結果、今回の決断に至りました。

五 脱退するとはいえ、国際的な海洋生物資源の管理に協力していくという我が国の考えは変わりません。IWCにオブザーバーとして参加するなど、国際機関と連携しながら、科学的知見に基づく鯨類の資源管理に貢献する所存です。

六 また、水産資源の持続的な利用という我が国の立場を共有する国々との連携をさらに強化し、このような立場に対する国際社会の支持を拡大していくとともに、IWCが本来の機能を回復するよう取り組んでいきます。

七 脱退の効力が発生する来年七月から我が国が行う商業捕鯨は、我が国の領海及び排他的経済水域に限定し、南極海・南半球では捕獲を行いません。また、国際法に従うとともに、鯨類の資源に悪影響を与えないようIWCで採択された方式により算出される捕獲枠の範囲内で行います。

八 我が国は、古来、鯨を食料としてばかりでなく様々な用途に利用し、捕鯨に携わることによってそれぞれの地域が支えられ、また、そのことが鯨を利用する文化や生活を築いてきました。

科学的根拠に基づき水産資源を持続的に利用するという考え方が各国に共有され、次の世代に継承されていくことを期待しています。以上

- (26) 網走市水産漁港課への聞き取りは、2018（平成30）年8月22日（水）に実施。
- (27) 鯨の提供は、1993（平成5）年6月に1回、20年ぶりに市内の21の小中学生約5千人に、ミンククジラ約300キログラムの竜田揚げの給食を1回限り提供した（読売新聞 H5.5.7.）また、H13.1.19組織されたIWC会議対策実行委員会が給食に「ミンククジラの大和煮」を無料提供し市内の小中学校の給食にミンククジラの缶詰を出し、18の小中学生4千人、1人当たり約90グラムを提供した（平成12年 .12.5 読売新聞）。また、平成14年には、同じくIWC会議対策実行委員会が串カツを15小中学校1400本、30グラムのミンククジラ肉を提供している（網走新聞 H14.3）。
- (28) 協議会が30年ぶりに網走で揚がったミンククジラを使った料理はオホーツク総合振興局では鯨のオイスターソース炒めを出した。2016年度には三陸沖で捕獲されたミンククジラの鯨肉料理を市役所食堂で提供。17年度は網走で水揚げされたミンククジラの鯨肉を市役所食堂に20キロ、振興局食堂に12キロ用意。市役所で3/26～30に竜田揚げ定食、ソテー定食、カツ定食（各500円）を196食、振興局で26日と28～30日にカツ、オイスターソース炒め（各610円）を計111食提供（H30.7.31 みなと新聞）。
- (29) 8市町（斜里町、網走市、北見市、佐呂間町、湧別町、紋別市、雄武町）が対象。

（参考文献）

- ・『北海道開拓記念館第63回特別展「鯨」図録』北海道開拓記念館、2007年。
- ・米村喜男衛『モヨロ貝塚資料集』網走郷土博物館、1950年。
- ・大場利夫「モヨロ貝塚の出土品」北海道大学、1962年。
- ・菊池慶一『街にくじらがいた風景 オホーツクの捕鯨文化と庶民の暮らし』寿郎社、2004年。
- ・児玉作衛門『モヨロ貝塚』北海道原始文化研究会、1948年。
- ・『網走市史上巻』網走市役所、1958年。
- ・『網走市史下巻』網走市役所、1971年。
- ・『新網走小史』網走市総務部、1987年。
- ・『網走タイムズ』連載2005～2006写真で巡る網走今昔物語。
- ・『続網走百話』網走市教育委員会、1992年。
- ・『網走市市政施行50年記念・史跡標注ガイド・網走歴史散歩』網走市教育委員会、1998年。
- ・『網走市総合計画（2008（平成20）年～2017（平成29）年）基本計画』網走市。
- ・『新網走市水産振興計画』06網走市、平成18年3月。
- ・『2016（平成28）年版水産統計』網走市。
- ・『2008（平成20）年版オホーツクの水産・北海道オホーツク総合振興局管内漁業生産の状況』北海道オホーツク総合振興局。